

## 研究動向

## 欧州における東南アジア研究の現状と関連文献の所在——ロンドン大学 (SOAS) を中心として——

奥平 龍二

## はじめに

筆者は、一九九八年四月より一九九九年三月まで一年間、連合王国 (英国)・ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (SOAS = School of Oriental and African Studies University of London) において研究する機会を得た。

この間に見聞した英国を中心とする欧州における東南アジア研究の現状と関連資料の所在に関して以下に述べることにしたい。ただし、本稿は私が SOAS 在籍中、ミャンマー (ビルマ) 史研究の一環として、一年間という極く限られた期間で垣間見た、限られた情報に基づくものであり、これをもって欧州や英国における東南アジア研究の全貌を明らかにしようとしたものではない点、予めお断りしておく。

なお、以下の内容は、ロンドンを中心とする英国内の大学、研究所、図書館、研究協会、博物館、資料館をはじめ、欧州 (独、仏、チェコ) の若干の大学、研究所、図書館、独・ハンブルグで開催された第二回欧州東南アジア学会 (EUROSEAS = Europe Association for South-East Asian

Studies) で入手した諸情報や関連資料等をもとに書かれたものであることを付記しておく。また、本報告については、以前、筆者が行った同種の報告 (奥平一九八一—六〇十) を併せ御参照頂ければ幸いである。

本報告は、一九九九年六月三十日、本学海外事情研究所で口頭発表した内容を補足修正したものである。

## I 東南アジア研究の現状

## 1. 欧州における東南アジア研究

## (1) 「欧州東南アジア学会」 (EUROSEAS)

欧州全体の東南アジア研究に関する統一的な学会組織は「欧州東南アジア学会」であるが、この学会は、また、欧州最大のアジア関係学会である「国際アジア研究大会」 (ICAS = International Convention of Asian Scholars) を構成する八つの学会組織の一つでもある。EUROSEAS は一九九二年に設立された比較的新しい学会であるが、大半は欧州人で構成

されている。現在、学会本部はオランダのライデン (Leiden) に置かれている。同学会の規約によれば、EUROSEAS は欧州での東南アジア研究を鼓舞、高揚し、より広範な欧州コンテキストでの研究を目指している。

また、この学会を通じ、欧州人との異なるディシプリン同士の接触を深め、さらなる、学際的 (inter-disciplinary) で且つ国際的研究 (international research) を奨励している。さらにまた、本学会は、東南アジア地域における「地域間相互研究」(interregional research) を奨励している他、東南アジアやその他の地域の研究者に対して欧州での研究施設の利用に協力すること等が唱われている。EUROSEAS の主たる活動としては、(イ)「オランダ王立言語学・人類学研究所」(KITLV=Dutch Royal Institute of Linguistics and Anthropology)との協力による年二回のニューズレター (ENSEAS) の発行、(ロ)学会の開催、および(ハ)学会員人名録の刊行である。(イ)については、欧州各国間の研究協力、学会報告、各国における最近の学会・研究会・セミナーなどの活動状況報告、近刊書の紹介など欧州における東南アジア研究に関するあらゆる情報が網羅されており、現在、Vol.12・No.1(Nov. 1999)まで発行されている。(ロ)については、欧州各国が持ち回りで定期的に開かれる学会である。因みに、昨年九月二～六日、第二回大会が独・ハンブルグ大学で開催された。右学会に参加した筆者の印象では、事前の、あるいは当日の配付資料(プログラムや研究発表要旨など)は極めて周到に準備され、また、事前にレセプションなど研究者間の交流の場が数回設けられ、大会に相応しい雰囲気があった。しかし、他方、学会そのものは、参加者も多いこと

もあって、同時平行していくつもの分科会が開かれるため、また、研究発表のキャンセルなどによるスケジュール変更も少なくなく、その連絡が不徹底であったり、やや組織の運営には問題も見い出された。なお、第三回大会が明年(二〇〇一年)九月六日～同九日、英国で開催される予定である。(ハ)については、昨年、『東南アジア研究欧州人名録』(*European Directory of South-east Asian Studies*)がライデンで発行されたが、六一八ページからなる大部のもので、千二百名以上の会員の個人情報(所属機関と住所・電話・e-mail、自宅住所と電話、出身大学、学位の種類、学位論文のタイトル、ディシプリン、研究分野、研究対象国、関連分野、著作)が満載されており、また、巻末に主要関心対象国と主要ディシプリン別索引および居住国と主要関心対象国別索引が掲載されている。

## (2) 東南アジア研究の動向

前述の『東南アジア研究欧州人名録』は、現在の欧州における東南アジア研究の現況を物語るものとして、貴重な資料と言えよう。この『人名録』に欧州の全ての東南アジア研究者が含まれているわけではないと考えられるが、およそその実数が掴めることも確かであろう。会員千二百名余という数字は、我が国の東南アジア研究者の多くが参加している「東南アジア史学会」の会員数が約五百名、会員でないが明らかに東南アジア研究を行っている数を含めて約六百名と推定すると、単純に解り易く比較すれば、日本の東南アジア研究者の約二倍ということになる。この数字は、欧州全体としては、少ないと考えることも可能だが、欧州と東南アジアの現在の

地理的距離、両地域の政治・経済・文化的関係等を考慮すると、決して少ない数字でもないであろう。問題は、その中身である。上記『人名録』をもとに欧州各国別の東南アジア対象国別研究者数を一覧表にしたものが図表1である。この表からわかる通り、欧州の東南アジア研究の大きな特徴の一つは研究者の六十パーセント強がインドネシアを研究対象としており、また、インドネシア研究者の五十パーセント強がオランダに居住する者(大半はオランダ人)であることである。これは恐らく、オランダがインドネシアの旧宗主国であったという歴史的関係により、多面的な研究の伝統があるほか、領土的にインドネシアが東南アジアの中でも群を抜いて広く、その分研究対象地域や分野が多いことなどもその要因であろう。次いで研究対象国として多い順に、ヴェトナム、タイ、マレーシア、フィリピン、カンボジア、ビルマ(ミャンマー)、ラオスと続き、シンガポール、ブルネイは僅かである。他方、欧州において東南アジア研究の盛んな国としては、オランダ(ただし、八八パーセントがインドネシア研究)が圧倒的に多く、次いで、ドイツ、フランス、イギリスが多い。さらに、やや数は減るが、スウェーデン、デンマーク、スイス、フィンランド、ノルウェーと続く。

他方、欧州における研究対象国およびディシプリン別の東南アジア研究者数をみると、図表IIの通りとなる。この表から読み取れることは、欧州における東南アジア研究のディシプリンの割合は、高いものから順に、人類学(二四パーセント)、歴史(二八パーセント)、言語(八パーセント弱)、経済(約七パーセント)、政治(約六パーセント)、文学(五パー

図表 I、欧州における国別・対象別東南アジア研究者数

国別	研究対象 インド ネシア	マレーシア	シンガポール	ブルネイ	フィリピン	タイ	ラオス	カンボジア	ベトナム	ビルマ	東南アジア	インドシナ	本亜洋地域	ニューギニア	バヌアツ	植民地	ボルトガル	中国	計
オーストラリア	6	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
ベルギー	4	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	8
チェコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3
デンマーク	11	6	0	0	1	11	0	1	5	0	0	0	0	0	1	0	0	0	36
フィンランド	9	1	0	0	0	4	0	0	2	1	3	0	0	0	0	0	0	0	20
フランス	56	5	1	0	4	7	7	19	31	6	1	1	1	1	1	0	0	0	140
ドイツ	105	6	1	0	11	23	1	6	4	4	1	0	0	0	3	0	0	0	165
バガリー	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
イタリア	8	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
オランダ	420	9	1	0	11	4	1	3	13	3	6	0	0	0	7	1	1	1	480
ノルウェー	12	3	1	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
ポーランド	3	1	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	8
ポルトガル	1	3	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7
ロシア	17	4	0	0	6	3	0	1	7	4	0	0	0	0	0	0	0	0	42
スペイン	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
スウェーデン	11	5	0	0	1	11	9	1	14	1	1	0	0	0	0	0	0	0	54
スイス	20	0	0	0	4	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	27
イギリス	60	19	6	3	5	18	1	3	8	11	4	0	0	0	0	0	0	0	138
外国居住	40	1	0	0	2	3	0	2	4	1	3	0	0	0	0	0	0	0	56
計	785	65	12	3	47	91	19	37	96	33	22	1	1	13	1	1	1	1	1227

注：上記図表は上記図表は、EDSEAS 人名録 (1998 年版) pp.598-608 を基にして、筆者がまとめたものである。



セント)、宗教 (四パーセント)、社会 (約四パーセント)、生物学 (三パーセント)、芸術 (三パーセント)、考古学 (約三パーセント)、林・食品学 (二パーセント) 及び法律 (二パーセント) 等となっており、人類学と歴史研究が圧倒的に多いことである。国別・ディシプリン別では、インドネシア研究の二八パーセントが人類学、同一八パーセントが歴史研究であり突出して多いことである。この数字は、欧州の東南アジア研究において人類学と歴史研究が占める割合の各々七〇パーセントおよび六〇パーセント強に当たる。これら以外で比較的多いのは、インドネシアの言語、文学、宗教、政治、社会、芸術、生物学、考古学、林・食品学及び法学と続く。インドネシア以外では、ヴィエトナムの歴史研究とタイの人類学研究が挙げられよう。

以上、欧州における東南アジア研究の現況を EUROSEAS 学会の活動および同会員人名簿の研究活動を通じて観察したが、欧州の東南アジア研究は、外見的には、右学会組織を通じて、近年活発な活動が見られる。しかし、他方で、欧州の個々の国々においては、政府の財政難による研究・教育機関への予算の大幅削減で、東南アジア研究は、英・仏・独といった伝統的に東南アジア研究の実績のある諸国においてすら、個々人の研究は別として、組織としての研究はすこぶる活発であるとは言い難い。独の研究者の話では、国家の発展に寄与する分野の研究に予算が振り向けられ、東南アジア研究に対するプライオリティが低いと嘆いていた。どちらからと云え、EUROSEAS 学会本部がライデンに設置されていることが示す通り、目下、欧州にあつてオランダが東南アジア研究に比較的潤沢に予算が

振り向けられており、活発な研究活動が行われているとの情報を所々で耳にした。

## 2. 英国における東南アジア研究概観

先にみた通り、最近の欧州における東南アジア研究者数で見ると、英国の東南アジア研究は、オランダには及ばないが、独、仏と並んで、依然、その中心的な存在であることに変わりはない。確かに研究者の数においては、二〇年前とほぼ同じで横ばい状態であり〔奥平一九八〇—七参照〕、また、英国における東南アジア研究・教育の拠点の一つであつたセント大学 (University of Kent) の東南アジア部門が廃止されるなど、研究・教育環境は悪化している印象は免れない。しかし、他方で、歴史的に東南アジアの若干の国々の旧宗主国としての関わりから、国際的規模で、依然、活発な資料調査・研究が盛んに行われており、英国における東南アジア研究の伝統の重みを感じさせる。

英国の東南アジア研究の現状を知る一つの有効なバロメーターは、「英国東南アジア学会」(ASEASUK = Association of Southeast Asian Studies in the United Kingdom) の活動を見ることが出来る。ASEASUK は英国の東南アジア研究者の大半をもつて構成される東南アジア学会組織である。この学会の主たる活動は、研究大会を年一回、持ち回りで開催すること、および、春と秋の年二回のニュース・レター (ASEASUK NEWS) の発行である。このニュース・レターには、毎回、英国および欧州の東南アジア関係の学会、研究会、セミナーの案内や活動報告、近刊

書案内、書評、博士課程学生リストなど、東南アジア研究に関連する情報が満載されている。

また、英国の東南アジア研究・教育機関としては、詳細を下記に述べる SOAS の他、ハル大学 (University of Hull) とケント大学 (University of Kent) が従来活発な活動をしてきた。しかし、前述した通り、ケント大学では、東南アジア部門科が廃止されたため、現在、SOAS 以外で東南アジア研究の盛んな大学はハル大学のみとなった。この大学は、一九二八年にロンドン大学の学位授与校として創設されたが、一九五四年には独立した大学として再出発し、今日約八千名の学生数 (九十国からの留学生を含む) を擁する総合大学である。同大学には、東南アジア研究学科 (Department of South-East Asian Studies) があり、三十数名の研究スタッフを擁し、学部、大学院博士課程まで設置されている。同学科では、毎年度、年次報告書 (Annual Report) が刊行されており、スタッフの紹介と活動状況、学部から大学院までのカリキュラム、セミナー、刊行物、フェローシップ、来訪者、学会報告など東南アジア関係の情報が網羅されている。また、ハル大学の社会・政治学学院 (SPC=School of Social and Political Science) 内に設けられている東南アジア研究センター (Centre for South-East Asian Studies) は、一九六二年に設置されたが、マレーシア、タイ、ブルネイの諸大学との公式の繋がりや東南アジアの政府省庁との接触が密である。同センターは毎年 *South-East Asian Studies* という案内書を刊行し、活動状況が報告されている。

### 3. SOAS の東南アジア研究

SOAS については、各方面で既に、紹介されている (石井一九七五、奥平一九八二) ので、ここで改めて言及するまでもないが、筆者の滞在期間に見聞した諸点を中心に話を進めたい。SOAS は、一八三六年創立のロンドン大学 (University of London) に属すが、そもそも、ロンドン大学とは、オックスフォード大学やケンブリッジ大学のような一つの大学組織のもとで多くのカレッジから成る大学ではなく、教育と研究が行われている四六を数えるカレッジ、インスティテュート、スクールなどの連合大学 (a federation University) であり、年々、それぞれの独立性が強まる傾向にある。従って、一九一六年創立の SOAS も、ロンドン大学に属しながら、実質的には同スクールの学長 (Director) のもとに独立した教育・研究機関である。現在、SOAS は研究者 (Academic Staff) 二〇〇余名、学生数二千五百 (University of London P.17 参照) を擁するとあるが、実際には学生数は二、八四名 (一九九七・九八年度)、三、〇一名 (一九九八/九九年度暫定) と年々増加している。外国人留学生も多く、ほぼ、百力国に及び、英国人より外国人が目立つ国際色豊かな大学である。学生は、学部生 (B.A.=Under Graduate Students)、大学院生 (Post Graduate Students) および聴講生 (Part time Occasional Students) などの Non Degree Students などから成るが、大学院は、修士課程 (M.A.=Master Course) と博士課程 (最初の一年間は Mphil= Master of Philosophy 学生として登録し、のち、Ph.D. コースへ移籍する) が設置されている。また、SOAS は、英国における外国語研究教育のメッカであり、四十に達

する外国語が教えられている。また、当大学の図書館は一九一六年の創立以来、東洋アフリカ関係の図書を中心に夥しい数の文献図書を所蔵しており、東南アジア関係についても各国言語及び西洋語文献が充実している。

しかし、御多分に洩れず、英国でも一般的に研究教育予算に関し財政難で、SOASも例外ではない。同図書館員によれば、今後の図書購入には財政的に問題が多いとのことであった。また、筆者の滞在中には、人事面で教官のリストラ問題（ビルマ語教官の後任や言語学科の教官補充など）が浮上し、また、SOAS GTIIバーシティ・カレッジ (UCL) への吸収の噂などで大きく揺れていた。こうした財政難は、授業料の高騰を招き、かつては無償であった国内人もEDU学生も現在は有償であり、また、外国人留学生の場合は、前者の三倍近い高い授業料（七九五〇ポンド）を負担せねばならないのが現状である。

SOASにはアフリカ言語文化学科、中近東言語文化学科、南アジア言語文化学科、東南アジア・同島嶼部言語文化学科および東アジア言語文化学科の五つの地域学科と人類学・社会学科、芸術・考古学科、開発研究学科、経済学科、地理学科、歴史学科、法律学科、言語学科、音楽学科、政治研究学科、宗教研究学科という十一のディシプリン学科がある。また、地域学科とディシプリン学科を結び付ける組織として、アフリカ研究センター、中近東研究センター、南アジア研究センター、東南アジア研究センター、コリアン研究センター、日本研究センター、中国研究センター、現代中国研究所という八つの地域研究センター乃至研究所が設置されている。この内、SOASにおける東南アジア研究は、地域学科としての東南アジア

図表Ⅲ、SOAS 東南アジア国別・分野別研究者数〔SOAS 資料をもとに筆者作成〕

分野別 国別	東南7	人類	芸・考	開発	経済	地理	歴史	法律	言語	音楽	政治	宗教	計
インドネシア	3 (1)				1				(1)				4(2)
マレーシア	2 (1)							1			(1)		3(2)
シンガポール								(1)					(1)
ブルネイ													0
フィリピン											1		1
タイ	2	1	(1)			1	1	(1)	1				6(2)
ラオス		(1)											(1)
ベトナム	1						1						2
カンボジア	(1)		1								1		2(1)
ビルマ	1		(1)					1	(1)				2(2)
アセアン													0
東南アジア							(2)	1 (2)		(1)	(2)		1(7)
	9 (3)	1 (1)	1 (2)	0	1	1	2 (2)	3 (4)	1 (2)	(1)	2 (3)	0	21

注：( ) 内は、副専攻地域としてカバーしている場合を示す。

ア言語文化学科所属の研究者とディシプリン学科の個々の東南研究者およびそれら双方が一体になった東南アジア研究センターで行われている。

SOASの東南アジア研究の現状については、まず、基本的に、東南アジア言語・文化学科における言語・文学研究がある。即ち、ビルマ語文 (Burmese language and literature)、カンボジア・クメール語文 (Cambodian Khmer language and literature)、インドネシア語文 (Indonesian language and literature)、マレー語文 (Malay language and literature)、タガログ語文 (Tagalog language and literature)、タイ語文 (Thai language and literature) 及びベトナム語文 (Vietnamese language and literature) の六専攻コースである。研究スタッフは十一名 (一九九八/一九九九現在) であり、内訳は、東南アジア語学・文学一名、ビルマ語学一名、インドネシア・ジャワ言語学一名、インドネシア語学一名、マレー・インドネシア文学・文化一名、インドネシア・マレー語文献学一名、タイ語学・文学二名、タイ・クメール語学一名、ベトナム語学一名、ベトナム語学・文学一となっており、その他、ビルマ語、カンボジア語、タガログ語、タイ語などにネイティブ・スピーカーとして補助教員 (Teaching Assistant) が配置されている。他方、ディシプリン学科では、人類学、芸術・考古学、経済、地理、歴史、法律、言語、音楽、政治、等の分野において、東南アジア地域を専門乃至力バする研究スタッフがいる。これらを合わせると、SOASにおける東南アジア研究者数は二二名である (別表Ⅲ参照)。

次に東南アジア研究の学際的組織として、東南アジア研究センターがあ

図表Ⅳ. 東南アジア研究センター主催セミナー (1994年4月～1999年3月)  
、国別・分野別の研究発表内容 (SOAS資料をもとに筆者作成)

分野別 国別	言語	文学	経済	宗教	政治	生態	歴史	法律	社会	都市	労働	人類	文化	保健	音楽	合計
インドネシア						1	1		1		1					4
マレーシア			1		3			1								5
フィリピン									2							2
シンガポール																0
ブルネイ																0
タイ		2	1		1				1							5
ラオス																0
カンボジア																0
ベトナム																0
ビルマ							1					1				2
東南アジア			1	1		1				1			1	1		6
アセアン					1											1
インドシナ																0
合計	0	2	3	1	5	2	2	1	4	1	1	1	1	1	0	25



る。ここは、原則的に週一回(時に二回)、セミナーを開催している。因みに、筆者が滞在中に開催された年間二五回のセミナーの国別・分野別の研究発表内容の内訳は別表Ⅳの通りであり、地域別では、東南アジア、タイ、マレーシア、インドネシアが比較的多く、内容的には、現代政治、経済、社会の分野が多く、人文の発表が極めて少ない。これは、東南アジア研究センター所長によれば、年間計画を立てる際、予算獲得のためにも、学生に関心が強く多数の参加が見込まれる現代の諸問題を扱うことになる由である。また、例えば、東南アジア史に関するセミナーは、別個に、歴史学科のセミナーで東アジア史との共催を試みた時期もあったが、東南アジア研究センターとの関係もあり、現在はディシプリン学科での東南アジア関係のセミナーは皆無であり、同研究センター一本に絞られている。

もう一つの、SOASにおける東南アジア研究の動向を窺い知る材料として一九九三年以来発行されている SOAS の東南アジアのみを扱った学術雑誌 *South East Asia Research* がある。これは、年三回発行されているが、過去六年間(一九九三―一九九八年)に扱われた四九件の東南アジア地域別・分野別・論文数(別表Ⅳ)をまとめたものであるが、地域別では、タイ、フィリピン及びマレーシアが多く、また分野別では、政治、社会及び歴史に関する論文が多い。この数字だけで傾向を語ることとは勿論妥当ではないが、このジャーナルが欧・米・日などの第一線級の東南アジア学者のレフェリーを経て発行される高いレベルの研究誌であり、また、対外的に広く投稿が認められたインターナショナルなものとして、上記の結果は一つの目安として興味深いものを感じさせる。

図表Ⅴ、SRA: RESEARCH (ジャーナル) に見る国別・分野別論文数

分野別 国別	言語	文学	宗教	政治	経済	軍事	外交	歴史	農業	社会	人類	環境	観光	労働	法律	経営	合計
インドネシア			1										2				3
マレーシア		1		3					1	1					1		7
シンガポール				1				2		1							4
ブルネイ										2							2
フィリピン				3		1		2		1	1			1			9
タイ		1		4				2	1	1		1				1	11
ラオス																	0
カンボジア								1									1
ベトナム			1	1				2		1							5
ビルマ					1										1		2
東南アジア				1	1					3							5
アセアン																	0
インドシナ																	0
合計	0	2	2	13	2	1	0	9	2	10	1	1	2	1	2	1	49

なお、筆者の滞在中の一九九八年六月、SOASにおいて、優先的研究プログラム (Academic Priorities Programs) の一環として、「研究優先度作業会合」(Academic Priorities Working Party) が開かれ、東南アジア地域の人類学者等五人のコンペーナーからなる研究委員会 (Academic Board) が連続討論会を主催した。どの研究に優先的に予算をより多く配分するかという点に関心があるようであったが、当時の段階では、具体的結論が出された訳ではなかった。ここでは、提示された検討五項目のみを以下に掲げるに留める。

- (一) Future Approach in the Social Science
- (二) Interdisciplinarity
- (三) Future Approach in the Humanities
- (四) Future Approach in Languages and Linguistics
- (五) Area Studies and Cross Regional Studies

## II 東南アジア関係文献

上記の欧州における東南アジア研究に相応する欧州における東南アジア関係文献の所在については、それらを紹介することは筆者の能力を遥かに超えたことであり、また、既に個別の国における状況が各方面で紹介されてきており、ここで改めて言及するには及ばないと考える。筆者自身が垣間見た欧州の大学・公共図書館については、ビルマ関係文献を所蔵するいくつかの例を取り上げた『東京外大東南アジア学』(第六号)を御参照頂

ければ幸いである。筆者自身が滞在した英国における東南アジア関係文献の所在についても、広範に及び、量的にも膨大なそれらを紹介することも勿論、筆者の能力を超えている。ここでは、歴史関係に絞って可能な範囲で御紹介するにとどめる。

### 1. 英国における東南アジア関係文献

ロンドン市内の Chancery Lane にある「王立歴史文献委員会」(The Royal Commission on Historical Manuscripts) で発行している *Record of Repositories in Great Britain* は、英国全土の大学・公共図書館、資料館、博物館の古文書部門一覧であり、連絡先住所、電話・ファックス番号、e-mail の記載された便利なパンフレットである。これを頼りに丹念に時間をかけて訪ね歩けば英国の公共施設における東南アジアの歴史文献の所在を大まかに把握できよう。また、ロンドン大学本部 (Senate) 図書館には、地方を含めた全国の主要大学・公共図書館の所蔵西洋語文献 (Western Manuscripts) 目録が閲覧でき、おおまかな見当をつけることが出来る。また、英国図書館 (The British Library) 発行の Ian A. Baxter (一九九〇) 等の一般的概要案内もある。また、ついにながら、ロンドン市内の Holborn にある古書店 Skoob 発行の『全国古書店案内』(参考文献参照) など英国に散在する歴史文献を発掘する手掛かりとなろう。

次に、東南アジア地域に限定すれば、西洋語文献目録として、J.D. Pearson の二巻本 (一九八九 & 一九九〇) がある。これは、南アジア及び東南アジア関係の西洋語文献を第一巻 (ロンドン) と第二巻 (ロンド

ン以外の英国国内)に分けて制作された権威ある目録である。また、東南アジア歴史研究に欠かせない膨大な文献を所蔵する「英国図書館」では、東洋・インドオフィス・コレクション部が一九九八年八月、旧インドオフィスを吸収して開館されたが、同部には同オフィス関係の膨大な文献が所蔵されている。Martin Mour 編によるインドオフィス関係文献 (India Office Records) の概要案内 (一九九六) や David M. Blake 編の東洋・インドオフィス・コレクション部所蔵の西洋語文献カタログ (一九九八) などもある。また、ロンドンの郊外 Kew にある「英国立公文書館」(PRO=Public Record Office) には、英国の政府・省庁などの歴史文書が所蔵されているが、PRO 所蔵の東南アジア関係文献については、清水元編『英国立公文書館の日本・東南アジア関係史料』(一九九二) が詳しく紹介しており、大変有益である。

## 2. SOAS の東南アジア関係文献

英国における東南アジア研究・教育の最大の拠点は SOAS であるが、それだけに同大学図書館は一九一六年の創立以来の伝統の中で膨大な資料の蓄積がある。もっとも、英国図書館や英国立公文書館 (PRO) のような写本を含む一次史料より、希少価値のある古い刊本が主であるが、この図書館の最大の魅力は、アジアやアフリカの現地語文献を多数所蔵していることであろう。その中で、東南アジア関係の西洋語及び現地語図書六万五千余、同定期刊行物約五五〇種、相当数のマイクロ・コレクション及び写本がある。また、同図書館の特別コレクション部には、キリスト教関係の

貴重な文献がマイクロフィシユの形で多数保存されているが、その中には、東南アジアを含むアジアのキリスト教関係の文献が多数存在する。これとの関連で、十九〜二十世紀の東南アジアのキリスト教関係の文献が SOAS 図書館に刊本の形でも所蔵されている。因みに、同図書館のコンピュータによる筆者自身による検索結果では、概数二八四点の東南アジア関係の文献があることが判明したが、その内訳は、ベトナム (五二点)、インドネシア及びビルマ (各々四九点)、マレーシア (三四点)、シンガポール (三二点)、タイ (二九点)、フィリピン及び東南アジア (各々十二点)、ラオス (九点)、カンボジア (六点) となっている。以上のようなキリスト教関係文献は、これまで史料として格別の注目を引いてこなかったように考えられるが、今後の東南アジアの歴史研究において一つの重要な史料として活用されることが期待される。

## 3. その他の大学・公共図書館、資料館及び博物館

以上掲げた大学・公共図書館、資料館及び博物館以外にも、東南アジア関係の文献を所蔵する公共機関はロンドンをはじめ地方にも散在する。筆者が確認した機関は次の通りである。Institute of Historical Research; Institute of Advanced Legal Studies; London School of Economics and Political Science (以上 University of London 所属)・The Royal Asiatic Society; The National Army Museum; Newspaper Library (The British Library)・The National Gallery of Victoria; Welcome Institute for the History of Medicine (以上 London)・Cambridge University

Library (Cambridge); Bodleian Library, Oxford University (Oxford);  
The John Rylands University Library of Manchester (Manchester);  
Edinburgh University (Edinburgh) などである。

## おわりに

本報告は、国際交流基金の研究助成にもとづく成果発表の一部である。  
同基金に対し深甚なる謝意を表する。また、上記調査に協力頂いた英国の  
大学・公共図書館、資料館及び博物館関係者に対する、この場をお借りして、  
衷心より御礼申し上げます。

## 参考文献

- A Brief Guide to Biographical Sources* by Ian A. Baxter  
1990(2nd edition) London: The British Library.
- A General Guide to the India Office Records* by Martin Moir,  
1996 London: The British Library.
- A Guide to manuscripts and documents in the British Isles  
relating to South and Southeast Asia*, compiled by  
JD. Pearson :I. London (1989) II. British Isles  
(excluding London) (1990) London Mansell

- Publishing Limited.
- Annual Report 1994 - 95/1995-96/1996-97*,  
Hull: The University of Hull.
- ASEASUK NEWS* (Newsletter of the Association of Southeast  
Asian Studies in the United Kingdom), No.23 Spring, 1998[bi-  
annual = twice a year]
- Bulletin of the School of Oriental and African Studies*  
[Annually] London SOAS.
- Catalogue of the European Manuscripts in the Oriental and  
India Office Collections of the British Library* by David M  
Blake, 1998, London The British Library.
- Centre of Southeast Asian Studies*, London : SOAS.
- Centre of Southeast Asian Studies-Newsletter*  
(January, 1999), London : SOAS.
- European Dictionary of South-east Asian Studies*,  
Compiled and edited by Kees Van Dijk and Jolanda  
Leemburg-den Hollander, 1998, Leiden
- KITLV(Dutch Royal Institute of Linguistics and  
Anthropology) Press.
- European Newsletter of South-East Asian Studies*,  
Vol. II /November 1998; Vol. II · No.2 May 1999 [twice a year],  
Leiden KITLV, EUROSEAS.

*EUROSEAS(European Association for South-East Asian Studies)*, 1997, Leiden.

*Handlist of unpublished finding aids to the London*

*Collection of the British Library*, compiled by R.C.

Alston 1991, London: The British Library.

*ICAS(International Convention of Asia Scholars)*,

Noordwijkerhout(The Netherlands)

Leeuwenhorst Congres Centrum, 25-28 June 1998.

*IIAS (International Institute for Asian Studies) Newsletter*

15( Winter, 1998 )(Summer, 1998)

Leiden Nederland.

石井米雄 一九七五年「S.O.A.S.の東南アジア研究」

『東南アジア歴史と文化』第五号、東南アジア史学会

一六〇〜一六一頁。(S.O.A.S.の東南アジア研究の現状について

は、『東南アジア史学会会報』一九七五年、No.二六、

九〜十一頁においても詳述されている。

*Missionary Archives on Asia*, on microfiche, SOAS Library

Special Collections Reading Room, Leiden:

IDC Publisher.

奥平龍二 一九八一年「欧州で垣間見た東南アジア研究の現状」、

『東京外国語大学『通信』第四三号、六〜十一頁。

*Post Graduate Studies 1999-Southeast Asian Studies*.

Hull: The University of Hull.

*Record of Repositories in Great Britain*, 1997 (Tenth edition),

London: The Royal Commission on Historical Manuscript.

清水元編 一九九二年『英国立公文書館の日本・東南アジア

関係史料』(文献解題三六)、東京・アジア経済

研究所。

*Skoob Directory of Secondhand Bookshops in the British*

*Isles*, 1996( Sixth edition), London: Skoob Books

LTD.

*SOAS - Department of the Language and Cultures of Southeast*

*Asia and the Islands Session 1997-1998*,

London: SOAS.

*SOAS Information* (11 January-22 March, 1999)[Weekly],

London: SOAS.

*SOAS-Internal Telephone Directory*, January 1998,

London : SOAS.

*SOAS - Language of Asia and Africa*, 1998, London: SOAS.

*SOAS - Postgraduate Prospectus 1998 Entry/1999 Entry*,

London: SOAS.

*SOAS - Programme for the beginning of the Session*

1998/1999, London: SOAS.

*SOAS (School of Oriental and African Studies ), University  
of London - Calendar 1998 - 1999*, London.

*SOAS-Undergraduate Prospectus 1998 Entry/*

*1999 Entry*, London: SOAS.

*Southeast Asian Research*, Vol.1( March, 1993)-Vol.6

No.3(November, 1998), London : SOAS.

*Southeast Asian Studies 1999*, Hull: The University of Hull.

*Survey of Historical Manuscripts in the United Kingdom.*

1997(Third edition ), London: The Royal Commission on  
Historical Manuscripts.

*University of London - A Guide to the Colleges and Institutes,*

London: The University of London Information

Centre, Senate House.